

報告タイトル

援助供与国韓国の複合的性格の形成

-新興国から先進国へ-

Formation of South Korea's Multiple Features as a Donor Country

- From emerging state to developed country -

氏名(所属)

鄭 倣民(京都大学)

JUNG Hyomin (Kyoto University)

要旨(800字程度)

韓国は途上国同士の南南協力の担い手を経て、2010年先進援助国のグループである経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)に加盟した。この間に形成された韓国の援助の性格をめぐって一部の先行研究は日本と同様の有償援助と経済インフラを重視する「日本型援助」だとする一方、別の研究は無償援助による貧困削減を重視する「DAC主流型」に類似するようになったことを重視している。本研究は、こうした見解の相違を念頭に置いて、韓国援助の形成過程を検証し、韓国の援助の実際のあり方と影響を与えた要因を明らかにする。

分析の対象は韓国に援助機関が初めて設立された1987年から2010年のDAC加盟までの期間とした。研究方法として第一に韓国の援助の形態、分野などの援助の性格を日本及びDAC諸国の平均と比較した。第二に援助の性格を規定する法令や実施の仕組みを検討した。得られた知見として2000年代半ばまで韓国の援助の形態、分野などの配分は不安定であることが分かった。とりわけ早い時期、韓国は近隣の先進援助大国である日本をモデルにして援助機関を設立したが、無償及び有償援助を連動したものとして包括的に捉え整合性を保つための法律・大綱、調整組織などの政策の整備は行わなかった。しかし、時代が下り、2000年代半ばになると援助の形態や分野は一定の方向性を持つようになった。韓国政府は国務総理を委員長にする国際開発協力委員会を設置するなど援助体制の一定の整備を行いより包括的・整合的な援助の実施を打ち出した。政府内では「日本型援助」の重要性を訴えた有償援助を管轄する企画財政部と「DAC主流派の規範」の重要性を主張した外交部の意見が併存していた。結局、韓国はDAC加盟を果たしつつ、そのどちらにも完全に舵を切ることはなく、複合的性格をおびるようになった。